

TOPICS 今号のトピックス

- 公開トークショー 人気番組メモリー「題名のない音楽会」
- 特別上映会 阪神・淡路大震災～放送ライブラリー保存番組から～
- 岩合光昭写真展「ねこ」&各種公開セミナー開催
- サテライトライブラリーの試験運用と大学教育での番組活用
- 第2回理事会で平成26年度事業計画ならびに収支予算が決定

■公開トークショー 人気番組メモリー「題名のない音楽会」

2月11日、教育、教養、バラエティ等のジャンルで、スタッフや出演者が番組を振り返る公開トークショー「人気番組メモリー」を、浜離宮朝日ホール（東京都港区）で開催した。第11回を迎える今回は、テレビ朝日で放送中の長寿番組『題名のない音楽会』を取り上げた。



[ゲスト]

富田 勲 (作曲家)

高嶋ちさ子 (ヴァイオリニスト)

鬼久保美帆 (テレビ朝日プロデューサー・ディレクター)

[司会]

大山 勝美 (放送人の会)

今回の応募総数は、「人気番組メモリー」歴代2位の1400人。永年の番組ファンやクラシックファンが詰めかけた。

1964年に放送を開始した『題名のない音楽会』は、今年で50年目を迎える。放送文化基金賞や日本民間放送連盟賞等、数々の賞を受賞しているほか、「世界一長寿のクラシック音楽番組」としてギネス世界記録にも登録されている。クラシックの本場である欧米でも、このような音楽の長寿番組は珍しいという。

番組開始当時の司会者は作曲家の黛敏郎氏。当初は3か月くらいしか続かないと思いながら始めたというが、その後1997年に亡くなるまで、33年間司会を務めた。番組の合言葉は「音楽を、一般の人々に、楽しく」。“マニアの好むクラシック”という印象を払拭し、多くの人に音楽の楽しさを知ってほしいとの思いから、ジャズやシャンソン、演歌など幅広いジャンルの音楽も交えて紹介した。トークショーは、「半世紀もの間愛され続けている音楽番組の魅力」

というテーマのもと、VTRを見ながら様々な切り口で50年を振り返った。

“世界のトミタ”と呼ばれる大音楽家であり、シンセサイザーの権威でもある富田さんは81歳。黛時代から何度も番組に出演しているだけでなく、黛氏とはかつて同じマンションの同じ階に住んでいたという。「エレベーターで6階



から1階に下りる短い時間の中で、出演を打診されたり、企画を持ちかけられたりした。『ムソルグスキーがピアノ曲“展覧会の絵”を作曲した50年後にラヴェルがオーケストラに編曲し、さらに50年後に富田さんが電子音で演奏した…というのを比較しよう』なんていう企画を、思いつきでわーっと喋ったと思ったら、さっさとタクシーに乗って行ってしまふ、なんてこともあった」と富田さん。高嶋さんも「自分も時々企画の提案をするが、ちょっとした思いつきが盛り上がってできちゃうことも多い」と賛同。鬼久保さんは、「かつて富田さんと黛さんがエレベーターの中でやっていたことを、今、高嶋さんと私はLINEでやっています」と明かした。



と明かした。

その高嶋さんは、番組内で「クレマー-ちさ子教授」を熟演。クラシック業界のおかしな点や不思議な点を、クレマー役になりきって追及する企画が好評を得ている。「クラシックの初心者向けの入門本を書いていた時、クラシック界にも様々なスキャンダルがあることを知った。敷居が高いと思っていても、スキャンダルを知ることで親しみが湧くし、そこは変なんじゃないのと首を傾げなくなる部分もたくさんある。それを番組でやったら面白いのではと提案したら、“クレマー-ちさ子教授”というポジションをいただいたので、自分としてはとても気に入っている」と話した。

現在の司会者、佐渡裕氏は2008年からの登場。佐渡氏を抜擢した理由として、鬼久保さんは「前の司会者である羽田健太郎さんが突然倒れられ、伝統ある番組の司会者を急

いで探さなければいけないという時に、これだけ歴史のある番組の中から育ってきた人はいないだろうかと考えた。佐渡さんは、番組25周年を記念して創設された、若手音楽家に贈られる出光音楽賞の第2回の受賞者。また、佐渡さんが師事していたレナード・バーンスタインは、かつてクラシック音楽をオーケストラと共に解説する番組『ヤング・ピープルズ・コンサート』をアメリカで作っていた。黛さんもこの番組を知っており、『こんな番組を日本でもやりたい』とスポンサーである出光興産に話したことから『題名のない音楽会』は生まれた。そしてその後、番組の礎となった『ヤング・ピープルズ・コンサート』を作ったバーンスタインから佐渡さんが教育を受けた…というように、不思議な巡り合わせが重なっているように思えた」と説明。とはいえ、「年の半分近くを海外で過ごす多忙な佐渡氏は、『会うまでは99%断ろうと思っていた』と今でもおっしゃる」と笑った。



富田さんは、作品『源氏物語』の中で、姫路の名産品“明珍火箸”を使用した。「楽器として作られたものではないが、あの音が『源氏物語』にとっても合うので使った。アナログ録音では、あの高い音はどうしても潰れてしまったが、デジタル技術になってから綺麗に録音できるようになった」と富田さん。また、ステイーヴィー・ワンダーが初来日した折に、この明珍火箸をお土産に渡したところ、目の見えないワンダーが「こんなに素晴らしい音を聞いたことがない。はるか宇宙の彼方から聞こえてくる音と、すぐ耳元で静かに鳴っている音の両方を同時に感じる。いつまでも聞いていたい音だ」と感動したというエピソードを披露した。鬼久保さんは「世界中の超大物と呼ばれる音楽家たちが、富田さんにアドバイスを求めに来る。本当に“世界のトミタ”なのだなあと実感するが、番組の放送後には、感想やかつてのエピソードを毎回メールしてください、とても気さくな方」と隠れた一面を明かした。



番組のポリシーの1つに「挑戦」がある。美空ひばりさんがオペラ『トスカ』に挑戦したり、岡本太郎氏がピアノを披露したことも。富田さんは、「美空ひばりの歌に圧倒された。知らない人は、彼女は本物のオペラ歌手だと思うのではないかと。それくらい役に足りてきている」と絶賛。鬼久保さんは「当時の黛さんが、いかに交友関係が広がったかが良く分かる。音楽家でもない、気分転換に弾いている程度の岡本さんに、よく出演してもらえたと思う」と話した。

また番組では、様々なコラボレーションも行ってきた。歌舞伎とオペラは同じ1600年頃に生まれていることから「カルメン」と歌舞伎を組み合わせてみたり、常磐津とロックのコラボレーションで、ディーブ・パープルの“Smoke On The Water”を江戸の大火事に置き換えて木遣りの声を盛り込むなど、斬新な組み合わせにも意欲的に挑戦した。

『題名のない音楽会』の収録は、基本的にコンサートホールで観客を前に演奏、収録をしている。撮り直しもしない。富田さんは「撮り直しや編集をすることで譜面上の完成度は高くなるかもしれないが、それをやると何かが無くなっていく。スポーツのように、一発勝負でやり直しがきかないという緊張感が音楽であると思う」と語り、鬼久保さんは「本番は、大ホールに満席のお客様がいます。演奏するまでの間や静寂など、お客様が何かを引き出してくれる空気があり、演奏者もレコーディングスタジオより演奏が乗る」と話した。高嶋さんも、「ずっとクラシックの中で育ってきた演奏家は、“人に聴いてもらいたい”より“自分が弾きたい”ことが先に立ってしまい、お客様に目が向かないことも多い。けれど、ちょっとオーバーかなと思った演奏でも、お客様がすごいと思ってくださった瞬間は演奏者に伝わる。それが自信になって、相乗効果でより良い演奏ができる。とはいえ、番組の本番は“自分ではなく、佐渡さんを聴きに来ているのではないか”という気持ちになりがちで、上手いかず落ち込むこともある」と笑いながら明かした。

番組では、多くの名演奏家が出演することから、教育に役立てようと公開レッスンも数多く行っている。特に佐渡氏の時期からは視聴者参加型の企画も多い。人気企画の1つが、指揮者になりたい夢を叶える“振ってみましょう”。佐渡氏が母校のオーケストラを指導するという回では、中学生の時に“振ってみましょう”に出演した少年が、佐渡氏の指導を受けたことがきっかけで本気で指揮者を目指し、佐渡氏と同じ音楽高校に入学していたというエピソードも披露された。

最後には、この先の企画も紹介された。日本を代表する演奏家を集めて、50周年を飾るスペシャル企画もあるという。「50年前というのは、ちょうど山下洋輔さんがフリージャズを始めた時期。当時は、フリージャズは雑音の一種とされていたほどだったが、50年たった今、ある種のスタンダードにもなり、洋輔さんの手法を引き継ぐ若者も出てきている。音楽界の1ジャンルの誕生と継承が行われるということが、“50年”の意味するところ。番組をきっかけに、そういう方々が生まれていることをお届けできればと思っている」と鬼久保さん。高嶋さんによる生演奏も披露され、302人の参加者は熱心な拍手を送っていた。



■特別上映会 阪神・淡路大震災～放送ライブラリー保存番組から～

1995年1月17日の早朝に発生した阪神・淡路大震災に関連するテレビ番組9本を、1月16日(木)、17日(金)の2日間にわたり情文ホールで上映した。そのうち5本は、今回初めて公開した番組である。それら5本の番組は、当センターが'96、'97年度に収集・保存したものの一部であるが、取材対象者のプライバシーなどを考慮して、これまで保存のみにとどめていた。今回、番組に記録された震災の体験を風化させることなく、今後の防災に役立てていただきたいと考え、各制作局の理解を得て、上映が実現した。

2日間に、のべ234人の来場者があった。アンケートには「作品の選定や上映順序がしっかりしていてよい」、「多くの人に見てほしいテーマなので、長い期間上映してください」、「地元局の取り組みに感心した」、「どの番組も見応えがあり、改めて防災、減災の重要性を再認識した」、「発生した当日に合わせて開催したのはよい」、「特に若い人に見てもらいたい」といった感想が寄せられた。16日には校外学習で関内地区を訪れた高校生9名が来場したほか、tvkテレビがニュースで上映会のようすを伝えた。

上映した番組は次の9本である。「震災16年特別番組 忘れないあの日 刻まれた震災」(2011年放送/サンテレビ)、「震災15年特別番組 生きる この街で」(2010年放送/サンテレビ)、「NHKスペシャル 減災」(2003年放送/NHK)、「NNNドキュメント'01 ジ・ジ・ん 子

供たちが刻んだ未来への言葉」(2001年放送/読売テレビ)、「NHKスペシャル 阪神大震災 (4) 日本の地下で何が起きているのか*」(1995年放送/NHK)、「活断層 近畿の地震危険地帯を追う*」(1996年放送/毎日放送)、「NHKスペシャル 阪神大震災 (6) 耐震都市をどうつくるか*」(1995年放送/NHK)、「定点観測 被災地・変容の記録*」(1996年放送/読売テレビ)、「メディアは今 阪神大震災 (1) メディアは何を伝えたか*」(1995年放送/NHK) [上映順、*印は初公開番組]。

上映会実施にあたり、番組に登場する40名以上の被取材者に連絡を取り、承諾を得た。一方、制作後十数年を経過した番組もあり、連絡が取れない方もいた。そのため、広報チラシに「お気づきの際には、連絡いただきたい」旨の表示をして、上映に踏み切ったが、一件の連絡もなく、上映会を終えることが出来た。



■岩合光昭写真展「ねこ」

2012年からNHK BSプレミアムで放送中の『岩合光昭の世界ネコ歩き』は、動物写真家・岩合光昭氏がネコの日線で世界の街角のネコを撮影した番組。岩合氏が写す愛らしいネコの表情を満喫できる番組として評判が高まっている。放送ライブラリーでは、春休みの企画展として、2月28日～4月6日に岩合光昭写真展「ねこ」を開催。岩合氏が40年以上に及ぶ写真家人生の中で、日本国内外を問わずに撮り続けてきたネコたちの写真125点を展示した。併せて、会場内で『岩合光昭の世界ネコ歩き』の番組も上映。会場は番組ファンの方、ネコ好きの方、岩合氏の写真のファンの方などで連日賑わった。「ネコの表情に癒された」「NHK BSの番組を毎回楽しみに見ている」「映像と写真でたっぷりネコが見られて良かった」など、たくさんの感想が寄せられた。期間中の入館者数は3万人を超えた(一日平均1,027人)。



■各種公開セミナー開催

◇3月16日、第53回ACC CMフェスティバル入賞作品上映会を開催。ラジオCM部門の審査員を務めた大久保佳昭氏を講師に招き、ラジオCMの上位入賞作品11本を紹介した。テレビCMはグランプリ受賞作品をはじめ119本の作品を上映した。参加者176名。

◇3月21日、公開セミナー「名作の舞台裏」を開催。今回は、地域発ドラマとして高い評価を受けたHTBスペシャルドラマ『ミエルヒ』(2009)を取り上げた。ゲストは主演の安田顕氏、脚本の青木豪氏、制作の藤村忠寿氏、企画の嬉野雅道氏。HTBの看板番組『水曜どうでしょう』のファンを始め、4000名を超える応募が集まった。当日は、チームワークが感じられるゲストのトークに満員の会場も一緒に盛り上がった。

◇3月22日、公開セミナー「制作者に聞く!～番組制作の現場から～『今、福島から伝えること～3・11大震災・福島原発事故を忘れない!』」を千代田放送会館ホールで開催。番組上映の後、番組制作者のNHK・中村直文氏、テレビユー福島・深谷茂美氏、福島テレビ・鈴木知加子氏を迎え、放送作家・石井彰氏の進行で、原発事故の農業への影響や現状、原発事故の検証と課題などを話し合った。

■サテライトライブラリーの試験運用と大学教育での番組活用

放送ライブラリーで公開している番組を全国各所で活用していくため、昨年11月に試験運用をスタートした、IP伝送による市川市文学ミュージアムでのサテライトライブラリーの運用、ならびに長崎県立大学での番組の利活用は、予定通り2月に終了し、利用した各施設から高い評価をいただいた。いずれも番組の公開方法は、放送ライブラリー内に設置した配信専用サーバーからIP伝送により番組をストリーミング配信できるBL・クリエイター支援サービスのシステムを活用した。再生操作等の運用は、施設運営担当者、担当教授が行い、番組の上映は初めての試みであったが、問題なく運用することができた。

■市川市文学ミュージアムで番組上映会を開催

サテライトライブラリーの試験運用は、市川市文学ミュージアムにおいて、同ミュージアムで開催中であった「水木洋子展」にあわせて、「水木洋子テレビドラマ上映会」を15日間開催した。放送ライブラリーで公開している水木洋子脚本のテレビドラマ7作品を、ベルホール(46人収容)で100インチのスクリーンに上映した。上映会には15日間でのべ429名の来場者があった。同ミュージアムからは「水木洋子の企画展開催中に、水木が脚本を手掛けたテレビドラマ作品を上映することは、



とても意義深く、来場者は、水木洋子の描く世界観を、実際に自分の目で見て、心に刻むことができたことは大変有意義であった。来場者からも大変好評であった。「水木洋子作品に限らず、企画展に関連した作品の上映会を実施していきたい」「将来的にはミュージアム内に端末を設置して、いつでも来場者が番組を視聴できるようにしたい」と、今後の更なる展開と期待を含め、評価をいただいた。

■長崎県立大学の授業で公開番組を活用

大学教育での番組の利活用は、長崎県立大学の国際情報学部情報メディア学科の「映像研究」の講義(村上雅通教授・平成25年度後期)において、放送ライブラリーの公開番組の中からドキュメンタリーやドラマなど4番組を使って授業を行なった。受講生には講義の前後にLL教室の10台のパソコンで、番組が視聴できるようにした。

村上教授からは「講義の時間内で番組全編を上映することは難しいが、講義の前後に番組を視聴させることができたので、講義では番組の解説や討論に多くの時間を割くことができ、学生の番組に対する理解度を深めることができた」「入手困難な名作番組を利用することができ、授業の内容を充実させることができた」「今後も継続していただければ十分あることが実感できた」との評価をいただいている。

今回の試験運用の実績を踏まえ、今後、サテライトライブラリーならびに大学での番組利用について、更に利用拡大を図っていく。

■第2回理事会で平成26年度事業計画ならびに収支予算が決定

2月13日に第3回事業運営委員会が開催され、平成26年度事業計画ならびに収支予算について説明、理事会に諮ることが了承された。2月28日開催の第2回理事会では、事業運営委員会報告が了承され、平成26年度事業計画ならびに収支予算が諮られ、いずれも承認された。

平成26年度の事業計画ならびに財政の概要は次の通りである。

[平成26年度事業計画]

平成26年度は、「向こう5年間の事業方針」に基づいて事業を実施する2年目に当たり、「収集・保存・公開の拡充」「利活用の推進」「存在感の強化」「財政基盤の確立」を重点事項とする。また、放送番組の分野における唯一の公共的なアーカイブである当センターの認知度を高め、機能を充実させていくことは喫緊の課題である。こうした基本的な認識に立ち、前年度に端緒を開いたサテライト・ライブラリーと大学教育における公開番組の利活用の提携先を拡大すること、及び過去に収集したが、公開に至っていない番組の権利処理作業を促進して公開番組数の増加を図ることに注力する。

財政面では、放送界の出捐を段階的に削減するなか、基本財産の運用収益拡大を目指すとともに、事業手法を精査して業務の効率化と経費の削減を図る。

■平成25年度放送番組収集諮問委員会を開催

3月19日に第22回(平成25年度)放送番組収集諮問委員会が開催された。委員改選に伴う新任委員(岩田幸雄・山口放送社長、川嶋明・日本新聞協会専務理事、児玉俊介・放送大学学園理事)を紹介後、議事に入り、番組の収集・保存・公開状況、サテライトライブラリーの試験運用状況と大学教育での番組活用状況と各施設からの評価、また、放送ライブラリー事業の現況などについて報告した。

それぞれの報告の後、各委員から多くのご意見、ご提言をいただいた。

■BL・クリエイター支援サービス利用状況

本格運用開始から3月31日までの利用状況。

◇配信番組数：テレビ番組2,746本、ラジオ番組744本

◇利用登録者数：451人(91社)、IPアドレス登録130社

◇視聴実績：テレビ番組 688回、ラジオ番組 93回

今後も本サービスの充実を図り、放送局員への利用を促進していく。利用方法など本サービスについてのお問い合わせは、当センター業務課まで(TEL:045-222-2881)。